

---

# IS～インフィニット・ストラトス～ ギアス世界の科学者が転生しました

あまねぎ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス） ギアス世界の科学者が転生しました

### 【Nコード】

N3243T

### 【作者名】

あまねぎ

### 【あらすじ】

神聖ブリタニア帝国。ナイトオブブラウンスの一人、メロディアーナ・スレインは死んで目が覚めると赤ん坊、アリエル・デュノアになっていた。

目が覚めた世界はブリタニアが存在しない別世界。その世界にはナイトメアフレームはなく、IS（インフィニット・ストラトス）という兵器がある世界だった。

## プロローグ（前書き）

この小説は独自解釈、ご都合主義が含まれておりますので注意してください。

## プロローグ

人生とは何が起こるかわからないとはよく言ったものだ。

6年前、私は死んだ。

いや、本当だよ。前世では、神聖ブリタニア帝国最強の騎士、ナイトオブラウンズの一人、ナイトオブファイブだったんだけど、シヤルル皇帝死後、次期皇帝ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア就任が認められず反旗翻したがナイトオブゼロ、枢木スザクの乗るランスロットのMVSに切られて撃墜死されました。

……クソッ。ロイドとセシルめ、ランスロット魔改造しすぎだよ。

いくら私のフローレンス（私の乗ってたKMFの名前）の性能がランスロットより下だったとはいえ、瞬殺とかないわー。思い出しからショックで二、三日落ち込んだ。メイドさんやお母さん、心配させてごめんなさい。

その後、転生し赤ん坊になった私は成長して行くと共に前世の記憶を思い出した。

驚いたことにこの世界は私の知っている世界ではなく別世界のようだ。

まず、この世界にはブリタニアが存在しない。

それだけならばブリタニアが滅んだ未来と言う可能性もあったが、

皇曆ではなく西曆、ナイトメアフレームが存在しない、エネルギーがサクラダイトではなく石油を使われているなどと、前の世界と違いが多数あることから別世界 平行世界と判断した。

そして、この世界に生まれて6年、別世界と認識し、現在進行形で混乱している時に世界を騒がす事件が起きた。

### 白騎士事件 。

日本に攻撃可能な各国のミサイル2341発。それらが一斉にハッキングされ、発射された。

それをたった一機の起動兵器で迎撃し、撃墜した。

さらに国際条約を無視して各国が偵察機を飛ばしたがそれも撃墜。

結果、ミサイル2341発、戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母五隻、監視衛生八基を撃破あるいは無力化した。

その日、全世界の人々が最強の兵器ISーインフィニット・ストラトスーを知ることになった。

前世、ラウンズと同時に科学者だった私は当然ISに興味を持ち、研究したいと思った。

しかし、現在私は6歳の幼女。いくら父が軍事企業 デュノア社の社長だとしてもそんな子供に兵器、ましてはISなんて触る機会なんてなかった。

それでも、何時かISを研究できる信じてそれまでの間、ISに組み込めそうなKMFナイトメアフレイムに使われた兵器の理論、設計図を書いたり、個人的な研究をした。

ブレイズルミナスに電磁装甲、フロートシステムなどは設計図まで完璧に覚えているから簡単に書けたが、輻射波動やフレイヤ、エナジーウイング、前世で研究していた人工サクラダイトは理論しか覚えてないので、実用化には時間がかかりそうだ。

まあ、ISに触れるのは数年後だろうからそれまでの間に完成させればいいよねー。

そう思い私は他人にデータ見られないようにデータをUSBメモリーに写してPCの電源を落とした。

コンコン。

「どうぞー」

「失礼します。アリエルお嬢様」

言葉と共に入ってきたのはメイドのセリア。私が生まれてたときからずっと世話してくれている人で使用人というよりもう一人のお母さんって感じの人。

「なんの用？」

「お食事の用意ができましたので呼びに。……アリエルお嬢様は何をなさってたのですか？」

「ISを調べてたの」

設計図を書く前にISの性能とかを調べてたから一応嘘は言っていない。

「IS……インフィニット・ストラトスのことですか。アリエルお嬢様はISに興味あるのですか？」

「既存の兵器の性能を大幅に上回るIS……私がデュノア社の一人娘であることを差し引いても大変興味深い機体ね」

ちなみに、現在6歳である私は前世の記憶持ちとばれないように五歳までは無邪気な子供として過ごしていたが、段々ボロが出始めて（め、面倒くさくなった訳じゃないからな！）今では普通に過ごしている。結果、意外や意外。特に怪しまれることはなく、親や使用人達からは頭のいい6歳児と認識されている。私の五年間苦労返せ。と思ったことは秘密だ。

「でしたら、お夕飯時に旦那様に頼んでISの開発見学を頼んだらどうでしょうか？」

「え、今日お父様が帰ってきてるの！？」

「はい。30分ほど前に。それと、先日、フランス政府との交渉によりデュノア社にIS開発許可が降り、ISコア二つを渡されました」

「ッ！　今すぐ食堂へ行くわ！　グエッ！」

私が走り出した直後、セリアが私の首根っこを掴まれた。

「お嬢様。早く旦那様とお話したいのはわかりますが、食堂に行く前にお手洗いを。それと廊下を走ってはいけません」

「……………はい」

……………ホント、セリアはお母さんみたい。



## プロローグ（後書き）

こんな感じでいいのでしょうか？

初めて書く小説で読みにくいかもしれませんが、頑張って連載を続けようと思います！

## 第一話アリエルちゃんのIS 見学（前書き）

続きを書いたら予想以上に時間がかかりました（汗）

今回はもの凄いご都合主義な話です！

## 第一話アリエルちゃんのIS 見学

ドガシャーン！ と開発室に響く。

開発室には、うつすらと煙が漂っていた。金属が溶けたような独特な臭いもする。

うつ、目がチカチカして喉がいたい。

すぐさま、部屋の換気扇を回し、煙をだすとロイドとセシルが咳き込んでるのが見えた。

『ふ、二人とも大丈夫？』

『な、なんとか』

『同じく』

セシルとロイドの無事を示す声。

『……またですか。メロディアーナさん』

『うつ、ごめん』

そう。またなのだ。これまで私は何度も実験で爆発させている。

今、私が研究しているのは人工サクラダイトの研究。

現在、サクラダイトの産出量の70%が日本 じゃなくてエリ

ア11だ。しかも、ほとんどフジサンからしか採れていない。

ナイトメアフレームの動力源のユグドラシルドライブの核、コア  
ルミナスはサクラダイトで作られているため、ナイトメアフレーム  
を作るときにサクラダイトは必須だ。さらに、これに利用するサク  
ラダイトの量は、ナイトメアフレームの出力限界に大きな影響を与  
える。サクラダイトの量によってナイトメアフレームの性能が決ま  
ると言っても過言ではない。

しかし、サクラダイトは希少性の高い金属だから高性能機を作る  
のは経済的に困難なのである。

というわけで私はサクラダイトに変わる電気抵抗の少ない超電導  
物質を作成しているのだが……見ての通り、全然うまくいってない。

『メロディアーナ、失敗は成功の元と言うけど君の場合、失敗し  
ぎだよ』

『うーん。どうしても、金属がうまく結合できない。やっぱ、反重  
力装置を発明しないと無理なのかなー』

宇宙　つまり、無重力空間ではアルミと鉛のような比重の違う  
金属を完全に混ざりあう。そのことから、無重力空間でなら人工サ  
クラダイトを作ることが出来るが

『　　そんな世紀の大発明するよりも、直接宇宙に行って作った  
ほうが手っ取り早いよ』

『……だよー』

確かにそんな大発明するくらいなら直接宇宙に行って作るほうが簡単だ。

第一に重力の存在は確認されているが、どういう原理で重力が発生しているのかは未だ不明な時点で重力の対をなす反重力を作るなんて不可能だ。

『それに、体育会系の君は元々科学者に向いてないからね』

『……セシル。ロイドが今日の昼御飯、セシルの手料理が食べた  
いってさ』

『何言ってるの!? 君は!?!』

『わかりました。張り切って作りますね!』

おお。料理を頼まれたことがあまりないのか、すごいやる気出してるね。セシル。

『あ、メロディアーナさんの分も用意しますね』

え。

『こ、これから皇宮の警備に行かないといけないからちょっと時間がない……かな?』

『でしたらすぐに作れるサンドイッチにしますからちょっと待って下さいね』

開発室から出てキッチンに向かうセシル。

だらだらと冷や汗が止まらない。

……………よし！　逃げよう！

開発室から出ようとしたらガシッ！　と肩を捕まれた。

『どこ行こうとしてるのかな？』

『い、いや、だから、お、皇宮の警備に』

『だったら、警備に行く前にしっかりと昼食を摂らないとね。ナイトオブ라운ズの君が警備中に空腹で倒れたりしたら大変だもんね？』

ギリギリと私を逃がさないように肩に握力を加えるロイド。

こいつ、モヤシの癖になんでこんなに握力があるのよ！？

『メロディアーナさん。お待たせしました』

『早ッ！？』

サンドイッチだから出来るのが速いのは分かるけどまだ、二分と経過してないわよ？

『今回はフルーツサンドにしました』

『あ、ありがとう』

フルーツサンドならあんまり変なものは入ってないだろうと一安

心。

見た目もパンの間にホイップクリームとあんまり悪くはない。

『じゃあ、頂くわね』

サンドイッチを手に取りパクツと口に入れる。

『……………グハッ!』

そして、私はあまりの味に気絶した。

「おはようございます。アリエルお嬢様。お目覚めの気分はどうですか？」

「…………わりと最悪」

目が覚めるとセリアの顔。

…………なんでセリアに膝枕されてんだろ？

「それはアリエルお嬢様が今日行くIS研究所が楽しみで夜眠れなかったため、車の中ですぐに寝てしまったからです」

そうだ。一週間くらい前、お父様にISを見てみたいと頼み込ん

で、今日、IS研究所に連れてってもらえることになってたんだっけ。

それにしても、IS研究所に行くのが楽しみで寝不足って……遠足を楽しみにしてる小学生か……って小学生だったわね。私。

やっぱり、肉体が精神引きずられてるのかな？

「それで、アリエルお嬢様、随分とうなされていましたがどんな夢を見たのですか？」

「……砂糖の代わりにクエン酸を入れたホイップクリームをふんだんに使ったレモンサンドイッチを食べる夢を見たわ」

それはまた……と気の毒そうな顔で私を見るセリア。

そう。あれはフルーツサンドと言う名の地獄の酸（味）ドイツだった。甘味なんて全くなく、ただ死ぬほど酸っぱいだけのサンドイッチ。

ちなみに酸（味）ドイツチ食べて気絶した後、ナイトオブファイブが何者かに暗殺されかけたと何故か事件になり、数カ月間皇宮で騒がれた。

「初めまして。IS研究所所長のカトリアです」



「初めまして。アリエル・デュノアです。今日はよろしく願います」

その後、IS研究所に着いた私は迎えに来てくれたIS研究所所長に挨拶する。

まだ、二十代を思わせる顔。保母さんみたいな優しそうな立ち振舞いと綺麗な顔立ち。髪は赤髪でふんわりとした香水の匂い。

その見た目と印象から、優秀な科学者と見てとれた。

「噂通り、行儀のいい娘ね。アリエルちゃんは」

「ありがとうございます」

行儀いい、頭がいいとよく言われているので特に照れることもなく返事する。

「では、よろしく願います。カトリア所長」

「あれ？ セリアはついてこないの？」

「はい。ここから先は国家機密になりますから、一介のメイドの私は入れません」

「え。その場合、私も入れないんじゃない？」

「アリエルちゃんはIS適正も調べるって名目だから今回は特別ね」

「……初耳なんですが」

「あれ？ 社長言ってなかったの？」

お父様、こう言う大切なことはしっかりと行ってください。

「それじゃ、IS適正を調べるのは後にして先に見学と行きましょ」

カトリア所長が私の手を取り、歩き出す。

「じゃあ、まずは実際にISを見てみる？」

「いえ、その前にISのデータとかを見たいんですが……大丈夫ですか？」

さすがにISのデータは見せてもらえないだろうなーと思いつつ一応聞いてみる。

「うーん。別に見せても良いけど、アリエルちゃんには難しくてわからないと思うなー」

えー。いくら、社長の娘とはいえ、小学生に国家機密のISデータ普通に見せてくれるの？

ここの研究所としての機密管理とか大丈夫なのかなーと本気で心配になってきた。

「問題ありません。今日のために勉強してきましたから」

「……本当、良くできた娘ね。  
じゃあ、特別に見せるけど誰にも言っちゃだめよ。これはお姉さんとの約束」

わかりました。と答え、心の中でガッツポーズをする。

「はい。これがデュノア初の第一世代IS『プロトタイプラファール』のデータ」パソコンに『プロトタイプラファール』のデータを表示したウィンドウを閲覧する。

……基本構造がまだ甘いわね。まあ、まだ第一世代だから当然か。あ、ここのパーツむしろ外したほうがいいんじゃない？　と思いつながらデータを閲覧していたが、段々の私は困惑してきた。

イメージ・インターフェースはともかく、量子化技術、絶対防御とか明らかにオーバーテクノロジーじゃない！？

私が困惑したのはISの根幹を担う技術。イメージ・インターフェースは前世の世界で神経電位接続と似たような技術はあったが、操縦者全体を保護する絶対防御や量子化技術なんてものは前世の世界でも不可能だ。

そして、私が一番注目したのPIC。

パッシブ・イナーシャル・キャンセラー

ISの浮遊・加速・停止を司る機関。

最初はフロートシステムと似た技術のものだと思ってたがデータを読み進めるうちにフロートシステムとは全く違う技術だと理解する。PICはおそらく

「反重力システム？」

自然と口から出た。

「反重力システムなんて難しい言葉をよく知ってるわね。確かに、アリエルちゃんが今見てるP I Cには反重力システムが搭載されてるわよ」

隣にいたカトリアさんが反重力システムと肯定する。

それを聞いた私は自然と喉の奥からアハハと笑いが漏れてくる。  
「……どうしたの、アリエルちゃん？」

「アハ、アハハハハ、アハハハハハハハハハハハ！」

勝手ににやけてくる顔で狂ったかのように歓喜の笑いを上げる。  
隣にいるカトリアさんや近くにいる研究員がぎょつとした表情で私を見るが関係なく笑う。

私がこの世界に来て一番ショックだったのはこの世界にサクラダイトが存在しないことだった。ナイトメアフレームを初めとして、前世いた世界で使われていた技術のほとんどがサクラダイトを必要とする。

サクラダイトが存在しないため、前世の知識持っているのに、それを全く生かせないということだ。

しかし、P I Cの反重力システムを使えば、前世で研究していた人工サクラダイトを作ることが可能だ。

そのことに気がつき、自然と歓喜の声を上げた私だが、その日からI S研究所を始め、デュノア社の研究機関に所属する研究員から社長の娘には邪悪なマッドサイエンティストがとり憑いているとい

う黒歴史とも言える噂が立った。

……うん。今は反省もしてるし、後悔もしてる。

## 第二話アリエルちゃんIS研究員になる(前書き)

ISやギアスを見直してたらこんなに遅くに!?

本当にすみません!

## 第二話アリエルちゃんIS研究員になる

「こんにちはー」

「いらっしやい。アリエルちゃん」

IS研究所に着き、挨拶するとカトリアさんが出迎えてきた。

うん。相変わらず、カトリアさんは綺麗でエリート科学者って感じだ。

「そうだ！今日はアリエルちゃんにプレゼントがあるのよ」

「……………また魔除けのアミュレットとかじゃないですよね？」

以前から、ここの研究員達に悪魔払いや魔除けといった道具をよくもらうのよね。主に十字架、聖水、お札、清めた塩、呪い移しの人形、銀の弾丸など古今東西。この前なんか「アリエルちゃん、いい子だからお姉さんと一緒に教会に行こうねー」と言われたり、本物のエクソシストさんと呼ばれたりして本気で泣いた。

前世の記憶を持った私が言えた義理じゃないけど、科学者なのにオカルトを信じるなよ。

「ち、違うわよ。これよ。……………ジャーン！」

「これって……………白衣？」

カトリアさんから受け取りマジマジと白衣を見ている。

うん。特に魔除けなどの変な模様も細工もない普通の小さな白衣だ。

「そ。白衣。アリエルちゃんがIS研究所に来てからもう一年にもなるのに同じIS研究所の仲間として、一人だけ白衣ユニフォームを着てないのはダメだ！　って思い、用意したの」

一年。

そう。私が最初にこの研究所に来てから一年たち私は8歳になった。

「えっと、私、研究員じゃありませんよ？」

「何言ってるの。アリエルちゃんは立派な科学者であり、このIS研究所の研究員よ」

「そうそう。アリエルちゃんはこの一年、ほぼ毎日研究所に来て一緒に研究した仲間じゃない」

「むしろ、仲間と思ってなかったらショックだわ。いつもお菓子あげてたのに」

「あんたそれ、餌付けしてるだけじゃない」

と、いつの間にか私達の話を聞いた数人の科学者が集まっていた。

……みんなが私のことをこんなに思っていることに目頭が熱くなる。



「……皆さんありがとうございます。早速着てみますね」

白衣を着てみるとサイズはピッタリで袖が無駄に長いと言ったこともなかった。

「……似合いますかね？」

「うんうん。とっても似合ってるよ！」

「キヤー！　かわいい！　抱き締めてもいい！？」

「白衣を着た知的雰囲気醸し出しながら上目遣いで見つめる少女……これが日本でいうMOEというやつなのか！？」

と研究員が暴走。

「はいはい。アリエルちゃんがかわいいのはわかったからそろそろ作業に戻る！　それとアンドレ、今日はもう休んでいいから今すぐら精神科の病院に行ってこい」

カトリアさんの一喝で不満を口に出しつつも作業に戻る研究員。

カトリアさん、グッジョブ！　あと、最期の人に関しては激しく同意です。今すぐ精神科に行け。

「じゃ、今日も頑張りましょ」

「はい！」

そう言うって私も研究員と一緒に作業をするのだった。

一年前。私は、PICの反重力システムを知ってから私はIS研究所に入り浸るようになった。

早速、人工サクラダイトの製作をカトリアさんをお願いしたが、小学生の意見　しかも、いくら国の援助があるとしても使えるかどうかわからない物を作る予算はない　なんか通るはずもなく却下された。

当然、私はその程度で諦めるつもりなんてなく、それを聞いた日、私は家に帰り、人工サクラダイトの製造方法、有用性、理論等を纏めたレポートをカトリアさんに提出し、再びお願いした。

そして、レポートを読んだカトリアさんは人工サクラダイトに興味をもったのか（私の熱意に根負けしたのかもしれないが）一度だけ製造実験してくれた。

結果は成功。本物のサクラダイトに負けなくらいの電導率を持つ人工サクラダイトができた。

この時、私は力の限り喜んだ。あ、言うておくけど、前みたいな狂喜の笑いはしてないからね。

これでサクラダイトを使用した兵器をISに組み込める！　と、思ったのだが　そう簡単にうまくいくはずもなく、別の問題が

待ち受けていた。

コストだ。人工サクラダイトを作るのにはISの根幹一つにして金喰い虫のPIC技術を使うため、ものすごいコスト　　お金がかかるのだ。

私は高いお金をかけてでも、人工サクラダイトを作る価値があると人工サクラダイトで作れる兵器　　ブレイズルミナス、輻射波動、フロートシステム、ハドロン砲等　　の理論を纏めたレポートを書き上げて、またカトリアさんに提出したのだが

「うーん。確かにどれもすごい発明なんだけどね……。ブレイズルミナスはすでにシールドエネルギーと絶対防御があるのに、さらにシールドを張る必要がないでしょ。

輻射波動。これは確かに強力な兵器なんだけど、シールドエネルギーを貫通する兵器はIS規定違反になるからダメ。

フロートシステムもそんなもの使わなくてもISは飛べるから言うまでもなく必要なし。

ハドロン砲みたいなビーム兵器を作るよりも、既に開発されている荷電粒子砲を研究したほうが圧倒的に安上がり。

よって、ISに組み込む必要はなし」

と、論破し、一蹴された。その後もカトリアさんに人工サクラダイト有用性を説明しようとしても「ごめん。今忙しいからまた今度ね」と話も聞いてくれない始末。……ひょっとしてカトリアさんの中では、私はイロモノ科学者という扱いなのかも。と、心の中で膝をついたりもした。

そんな一年の苦勞があり、今現在、私は何をしているのかという  
と。

「カトリアさん。 フレーム の開発状況ってどんな感じですか？」

「70%ってところね。 来月中には完成できるわよ」

と言って一緒に上を見上げる。 そこには 4、5メートルの  
大きさを持つロボット。 ナイトメアフレームが鎮座していた。

## 第二話アリエルちゃんIS研究員になる（後書き）

次話は早めに投稿する予定です。

### 第三話アリエルちゃん資金集めをする（前書き）

今日、ゲーセンでブレイブルーやってて、μ（ミュー）か（ラムダ）がIS世界に飛ばされる話を書いてみたいと思ったけど、この二人が一夏たちと会話するイメージが全く思い浮かばない……。

### 第三話アリエルちゃん資金集めをする

人工サクラダイトを使った兵器を開発・研究をしたいが、人工サクラダイトを量産するには莫大な資金がかかる。なら莫大な資金を作ればいいじゃない！ というわけでこの世界初のKMFナイトメアフレームを製造中です。

うん。自分でも人工サクラダイトを量産する資金作りのためにKMFを作るとか色々ないわーと思う。

でも私の知識の中で一番お金が稼げる発明はこれしかなかったの！  
って、誰に言い訳してるんだろ、私。

このKMF フレームは兵器用の機体ではない。運搬、建設、救助などに使う福祉を目的とした機体である。そもそも、現在デュノア社はISという超兵器を開発しているため、新兵器を作る余裕はない。それにサクラダイトを使用しないKMFは第4世代のグラスゴーくらいの性能しかでないしね。

ちなみに、カトリアさんはIS開発と兼任でKMF開発の主任になっている。もう、カトリアさんには一生頭が上がりないと思う。

「でもいいの？」

カトリアさんが少し困った顔をしながら、言った。

「何がです？」

「フレームを私の名前で発表すること」

「KMF開発の主任はカトリアさんじゃないですか。なら、カトリアさんの名前で発表するのが当然かと」

「確かにKMF開発の主任は私だけど、それはあくまで肩書き。KMFの基礎理論、OS、設計書などはアリエルちゃんが作ったですよ」

「まあ、確かにそうですが……。自分がいうのもなんですが、8歳の子供がKMF作ったって、色々不味くないですか？」

「……………」

何ですか、その「自覚はあったんだ……」みたいな顔は。

「自覚はあったんだ……」

実際に言いやがりましたよ。この人。

「でも、篠ノ之博士だって15歳の時にISを開発したわよ」

「あんなバグキャラと一緒にしないでください」

「……私から見れば貴女も十分バグキャラなんだけどな」

「？ すみません。聞こえなかったので、もう一度言ってくれませんか？」

「何でもないわ。気にしないで」



そう言って目を反らすカトリアさん。なんて言ってたんだろ？

「じゃ、フレームは私の名前で発表するってことでいいのね？」

「はい。私が欲しいのは名声じゃなくて、人工サクラダイトを作る資金です。」

「……………」

返事はなく…………カトリアさんは何時もの笑顔ではなく真剣な表示を私に向けた。

「…………ねえ、アリエルちゃん。貴女は」

ピピピ、ピピピ、ピピピ。

「あ、すみません。時間になっちゃったみたいです」

すぐに携帯を取りだし、PM17:30にセットしていたアラームを止める。

研究所に行くのは構わないが6時までには家に帰りなさい。とお父様に言いつけられているため、私は5時半には帰宅しないといけない。……せめて、あと、1時間はここにいたいけどガマンガマン。

「じゃあ、私はこれで失礼しますね。また明日」

「う、うん。また明日ね。アリエルちゃん」

そう言って私は研究所から出る。セリアを待たせちゃいけないから急ぐと。

## S i d e カトリア

アリエルちゃんが研究所を去っていくまで振った手を下ろす。

「お疲れ様です。所長」

「あら、アンドレ、まだ病院に行つてなかったの？」

「あれ、冗談じゃなかったんですか!？」

「本気に決まってるじゃない。ロリコンが許される国は日本とロシアだけよ。……はい。これ、知り合いがやってる精神科の病院の住所」

住所をメモした紙を手渡す。受け取ったアンドレがひでえ……と言っていたけど無視する。

暫くするとアンドレは復活して、目の前に鎮座しているフレームを見上げる。

「……それにしても凄いですよね。アリエルちゃんは」

感心した声で呟くアンドレ。私はその声に同意する。

「そうね。将来は篠ノ之博士を超えるかもね」

「まさか。いくら、あの娘が優秀でも篠ノ之博士を超えるなんて不可能」

「この前、あの娘が携帯用ブレイズルミナスを完成させたの」

アンドレの声を遮る。

「ブレイズルミナス？ …… ああ、アリエルちゃんを書いたレポートにあったエネルギーシールドでしたっけ？

そういや、1ヶ月くらい前、アリエルちゃんが主任に、人工サクラダイトを使った物を作りたいから色々パーツを用意して欲しいって頼まれたましたね」

「ええ。それで携帯用ブレイズルミナスの強度実験をしたの」

「へえ、それでどうだったんですか？」

「………… ラファールに装備されている五五口径アサルトライフル《ヴェント》を普通に弾いたわ」

「………… マジですか？」

アンドレがぐっだりとした声を上げる。私も強度実験したとき、そんな気持ちだったわ。

「でも、どうして所長はそれだけ強力なシールドをISに組み込まないんですか？ ISのシールドエネルギーとは別のエネルギーで

展開させるブレイズルミナスは十分、組み込む価値があると思うんですが」

「そうね。ブレイズルミナスはISに組み込む価値がある兵装よ。それだけじゃない。アリエルちゃんが書いた兵器のほとんどが今すぐ、ISに装備させる価値があるわ」

そう。以前、アリエルちゃんが考案した兵器はISに組み込む必要がないと言ったけど、あんなのは真っ赤な嘘。本当は今すぐ採用できる兵器だ。

ブレイズルミナスはさっきも言った通り、シールドエネルギーを消費しない強力なエネルギーシールド。

輻射波動は確かにIS規定違反になるけど、あくまでも競技用ISでは規定違反になるだけで、軍用ISになら普通に組み込める。むしろ、対、IS戦にこれほど有効な兵器はないと言っても過言じゃないでしょう。

フロートシステムだって、応用して浮遊機雷でも作ればかなり強力。

ハドロン砲も理論を読む限り、威力は従来のビーム兵器より上だから装備する価値は十分にある。

このことを話し、それを聞いたアンドレの顔は完全に青ざめてた。

「……確かに。8歳でそれだけ優秀なら将来、篠ノ之博士を越えるかもしれませんね」

「ええ。悔しいけど、この研究所で一番優秀なのは、間違いなくあの娘ね」

本当、悔しいけどな。

「だったら、なおさらアリエルちゃんが作った兵器を採用するべきじゃ」

「だからといって、8歳の子供に人殺しの兵器を作らせる訳にはいかないわ」

ッ！

アンドレだけじゃなく、遠目で聞いていた研究員も強張る。

「ここにいる研究員達は様々な理由で兵器を作っている。国の発展のためと言う人もいれば、単に兵器が好きだからとか、お金のためと言う人もいる。だけど、ここにいるみんなは、自分達が人殺しの兵器を作っていると自覚し、兵器を作る責任も理解しているわ」

私の声に、研究員達の瞳に強い意志が宿る。

「いくら、アリエルちゃんが優秀でも、子供に人殺しの兵器を作る責任を負わせる訳にはいかない」

研究員達を見渡すと、頷き、作業に没頭する。いつの間にか、アンドレも自分の作業に戻っていた。私は研究員達の行動に満足し、すぐに作業に戻った。

……………アリエルちゃんは知識だけでなく、8歳とは思えないくらい精神をもっている。だから、多分、人殺しの兵器を作る自覚も

あるし、責任も理解していると思う。だから私は聞きたかった。

アリエルちゃん。貴女はどうして兵器を作りたいの？

### 第三話アリエルちゃん資金集めをする（後書き）

投稿する時間は決めたほうがいいかな？  
それとも、書いたら即、投稿するべき？

もし、決められた時間のがいいなら、次回から19:00に投稿する予定。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3243t/>

---

IS～インフィニット・ストラトス～ ギアス世界の科学者が転生しました

2011年5月26日00時27分発行